

想うがままに

わたくし的医者不信

本誌編集委員 小寺山康雄

20もの病院に受け入れを断られ死亡した妊産婦。十分な説明も同意もなく病気の腎臓を移植された患者。こうした医者、病院の犯罪的行為は絶えることない。40年前、全共闘運動の嚆矢となった東大青医連がつきつけた「支配(者)としての医学(者)」は、今日に至るも「自己否定」されるどころか増長すらしているのである。

三度目の救急車体験

深夜2時、激痛が上腹部と背中を襲った。これまでも飲みすぎたりストレッチが溜まるとしばしば起こる症状であ

る。鎮痛剤、強力胃薬を飲み、腰に枕をあてがって腹部を伸ばし、逆に背中を屈めたりすれば、そのうち治るはずなのに、今回はひどくなる一方だ。

ついに119番する。救急車を呼ぶのは97年の咯血、98年の尿道結石に続いて、これが三度目。慣れたものである。

芦屋市にも市立病院があるが、いざというときには何の役に立たないしろものである。もともと救急態勢を布いていないうえに、最近では財政難を理由に不採算部門を民間に切り売りし、売れなければ閉鎖する。なし崩しに廃業する魂胆なのだ。

今年度いっぱい廃校する市立高校といい、芦屋市は公共空間を切り捨ててきた。換言すれば、医療、教育、福祉などで公的支援を必要とする市民を切り捨ててきたのだ。これらの年間経費はたかだか数億円なのに、なぜ切り捨てるかと言えば、これらはいずれも六甲山麓の景勝地にあるので、跡地を売れば数百億円はころがり込んでくるからである。

一方で、大阪―神戸間には既存の国道2本に高速道路まであるというのに、芦屋市は新たに巨大大道路を敷設し、はやくも閑古鳥が鳴いている巨大

グランド公園をそれぞれ数百万円もかけて建設している。

公を捨て私に奔り、支離滅裂の市政だが、ゼネコンとその下請業者、利権漁りの市議はこうした市政を首尾一貫歓迎している。

患者を脅かす医者

搬送されたのは隣市の公立病院。当直医は頼りない研修医でなく、一見、頼もしく見える中年の医者だったが、これがとんでもない奴だった。

病状や既往症を訊くので、大きな胃潰瘍を2度していること、原因不明の咯血、尿道結石など、あえぎあえぎ話して、これ以上は痛くて話せない。なんとか痛みを和らげてほしい。問診はそれからしてくれないかと、懇願した。ところが医者は「痛みは簡単に和らげられない。あなたが考えているよりもっとひどい病気かもしれないからだ。心筋梗塞か動脈瘤破裂の恐れもある。

血管にカテーテルを通そう」と、横を向いたまましらつとのたまうではないか。「なんやて。医者が患者を脅かすんかい。それにいきなりカテーテル通すとは何ごとや。それで死んだ人もいる危険な検査や。順序を踏め。カテーテルは拒否する」と、このときばかりは自分でも驚くほど元気になって怒鳴りつけた。こうして医者はようやく点滴を始めようとしたが、これまた何の説明もない。ぼくはまたまた怒り、インフォームドコンセントを要求したのである。

こうしてなんとか痛みは治まったが、怒りは収まらない。医者は、彼がやりたいカテーテル検査を拒否されたからであろう、いつの間にか姿を消してしまった。

まんじりともせず夜明けを迎えたばかりは、当然、朝一番にくだんの医者か専門医がやってくるものと思っていたが、何時になっても来ない。看護師だけが心配して何度も体温と血圧を測り

に来る。

看護師が5回目に来たとき、「忙しいのに何回も来てくれてありがとう。そやけどぼくは10分毎に体温や血圧が変わる重篤患者とちゃうやろ」と、彼女を笑わせ「すまんけど、医者に何時に来るか訊いてくれへん」と、頼んだ。

けつきよく医者は約束の11時（これも遅い）になっても来ず、診察は午後からなることを看護師に言わせるのである。申し訳なさそうに言う看護師に「あなたが謝ることとちがう。あのアホに言うとして。あいつはやれ心筋梗塞や動脈瘤破裂やと一刻一秒を争うかのように、さんざん脅しとして、午後から診察とは何じゃい。わしや帰ると、啖呵を切ってバジヤマのまま病院をとびだしたのである。

治療より研究優先の大病院

20年前、嫌がる母をむりやり大病院に入院させた。持病であった甲状腺

機能障害は厄介な病気なので、然るべき病院で検査、診察してもらえと、かかりつけの医者に言われたからだ。

病室に案内した若い医者、あれこれ母に話しかけるが、母は黙り込んだままだった。そこで医者が言った一言がいけない。「こりゃ、駄目だ。痴呆がかなり進んでいる」。

「あんななあ、おかんは入院のショックで口を利かんのや。会ったばかりのあなたにボケとか、へったくれと言われる筋合いはない」と、おかんの代わりに怒ってやった。後日、同室の人がぼくにちくったところによると、この医者はおかんに「一足す一はなんぼ」と、繰り返して試験していたという。何がなんでもおかんを痴呆症にしたかったのだから。

入院中、ぼくは何回もおかんの検査に立ち会わされた。おかんはぼくの言うことしか聞かなかったからだ。何の検査か、おかんにはむろん、ぼくにも

ろくすっぽ説明せず、おかんは大勢の研修医が取り囲むベッドに横たわらされ、まるで兎か犬のような扱いを受けるのだった。

当時のぼくは、これもおかんの病気を治すのに必要なことだと思いい、嫌がるおかんを叱りとばし、なだめすかしベッドに上がらせた。

ある日、外科医が唐突に、「咽の腫れが気にかかる。癌の疑いがあるので手術したい」と言いだした。おかんは「手術は嫌や。手術するくらいなら死んだほうがましや」と、駄々をこねる。困ったぼくは内科医に相談したが、その医者は「手術なんてとんでもない。大丈夫です。しかし、私がそう言ったことは外科医に言わないでほしい」と、親切に言ってくれたので、手術をせずに済んだ。

このままでは、おかんは切り刻まれ、新薬や新治療法の実験台にされ、ほんまに痴呆にされると、ぼくは恐怖

し、おかんを退院させたのは彼女が亡くなる三ヶ月前のことである。

退院しても通院していたが、いつものように通院した日の夜、真冬というのにおかんは全身汗みずくになり、苦しみがきだした。これは心臓だと直感したぼくは、まだ意識のあるおかんに「薬を貰っていないのか」と訊いたが、貰っていないというではないか。半年近くも入院して、身体中すみずみまで検査したのは何だったのか。ぼくの医者不信はこの日からである。けつきよくおかんは搬送中の救急車の中で、ぼくの手を握りしめながら息を引きとった。

死後、おかんの身辺を整理していたら大病院の診察券が出てきた。今でもそうなのかどうか知らないが、それには「本院は、医学の研究・教育を主たる業務とする」と、わざわざ記してあった。治療は主たる業務ではなかったのである。